
情けない僕はいつも思っている

西川裕美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

情けない僕はいつも思っている

【Nコード】

N2896V

【作者名】

西川裕美

【あらすじ】

三十一歳の誕生日を迎えた僕。なんでもない日常。どこかへ行きたくて、でも、どこへもいけない僕。いつかの恋の思い出。

朝目が覚めると

その日目が覚めたのは午前十一過ぎだった。せつかくの休みなのでもう少し早起きして有意義に過ごしたいと思っていたのだけれど、今となってはそれももう叶わぬ夢となってしまった。あーあと思った。あーあ。

部屋のなかには妙に薄暗かった。部屋のカーテンを開けてみると、案の定どんよりと曇っている。空を覆う厚い灰色の雲はまるで僕の心情をそのまま表したみたいだった。

頭が痛かった。頭が痛いというよりはどんよりと重たい感じがする。たぶん眠りすぎたせいだ。それとソファアーの上で眠ってしまったせい。僕が一人暮らして居るアパートはロフトが付いていて、普段はそこで寝ているのだけれど、夏場のこの時期はかなり蒸し暑くてとてもじゃないけれど眠っていられない。だから勢いいつもソファアーのうえで眠ることになるのだけれど、それだとあまり疲れが取れないのか、翌朝目を覚ますと妙に身体がだるい感じがある。

僕はとりあえずという感じでそれまで横になっていたソファアーから起き出すと、洗面所に行つて、小便をして、顔を洗つて、歯を磨いた。鏡で自分の顔を見てみると、もしかするとただそんな気がするだけなのかもしれないけれど、昨日までの自分の顔と今日の自分の顔は少し違っていているような気がした。なんというか、歳を取った感じする。単純に老けた気がする。

僕は昨日、三十一歳の誕生日を迎えた。高校の頃や大学生の頃は自分がほんとうに三十歳になってしまうなんてとても信じられなかったけれど、実際にはあっさりと三十歳なってしまうものだ。ほん

とにあっけなさすぎるくらいだ。映画でいうと、いつの間にかはじまっていつのまにか終わってしまつて、えっ！？もう終わり？とびつくりしてしまうような感じ。そして今の僕はその三十歳すら通り越してしまった。ショック！ショック！ショック！

現在僕は三十一歳、フリーター。彼女なし。なんという惨めな肩書きだろう。悲惨だ。頭を抱えたくなる。いや、抱えるべきだ。というか、自殺した方がいいのかもしれないと真剣に悩んだりすることも、たまに、ある。

僕が定職についていないのは小説家になりたいためで、大学を卒業してからずっとアルバイトをしながら小説家を目指して来た。でも、結果は惨敗。小説家のしょの字もない。いい加減小説家になることなんて諦めるべきなんだろうし、就職した方がいいんだろうけど、でも、小説家になりたいという意思は自分のなかで半ば意地みたいに凝り固まつていて、それを今更改めることなんてできそうにない。そもそも今のこの就職難の時代に僕のような人間が就職することなんてまず無理なんじゃないのか。なんといったって新卒のひとが就職できなくて困っているくらいなのだから。でも、ずっとこのままというわけにもいかないよなと思って、将来のことを考えると、まるで暗くて細長い廊下に迷い込んでしまったみたいに暗澹とした気持ちになる。

でも、まあ、いいや。そんなことをくよくよ考えていてもはじまらないので、とりあえず外に出かけてみることにした。いずれしても、今日は以前ツタヤで借りていたアダルトDVDを返しにいかなければならぬ用事がある。む。

ツタヤへ

アパートの外に出ると、曇りとはいえ、かなり蒸し暑かった。何もしていないのに汗が滲み出てくる。

自転車に跨がる。ペダルを漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。自転車に乗っていると風が吹くのでさきほどまでの蒸し暑さは多少軽減されるけれど、あまり涼しいという感じではない。どちらかというと生温い扇風機の風を浴びている感じに近い。

僕のアパートから最寄りのツタまでは自転車で15分くらいかかる。遠くもないけれど、近くもない。蒸し暑さのなか自転車に15分も乗っていると、嫌でも汗が吹き出してくる。

ツタヤのなかに入ると、冷房が効いていてかなり心地良かった。思わず瞳を閉じたくなる。肌に張り付いていた汗の粒が、逃げ惑う虫のように再びの体内に潜り込んで行く感覚がある。

とりあえずという感じで店内を物色する。新作は何が出ているのか。借りたいものはないか。洋画コーナー。CDコーナー。邦画コーナー。せつかく15分もかけてきたのだから、借りていたDVDを返してすぐに帰るのもなんだかもったいない気がする。

そしてアダルトDVDのコーナー。ついこのあいだ借りたばかりなのでちよつと躊躇したけれど、結局我慢できずに僕はアダルトコーナーの暖簾を潜った。

ここのツタヤのアダルトDVDコーナーは異臭がする。といっても、猛烈に臭いというわけではなくて、ほんの微かな、そんな気が

するかな、という程度の異臭だ。古い汗のような匂い。このアダルトDVDコーナーに群がる男たちの性欲が体積した匂い。どこか物悲しい、憐憫とした感情を抱かせる匂いだ。

平日の昼間の時間帯ということもあってアダルトDVDコーナーに客の姿は僕の他にひとりしかいなかった。僕の他にアダルトDVDを物色しているのはもう優に六十歳は過ぎているだろうと思われる、すっかり頭髪の薄くなった老人だった。老人はフレッシュギヤルズコーナーのDVDを熱心に手に取ってみていた。アダルトDVDを手に取り、DVDのパッケージをじっくり観察してから、また棚に戻すという作業を繰り返している。僕はこんな年齢になっても性欲が衰えないなんてすごいな、と崇拜するように思った。

僕も老人に劣らない熱心さをもってアダルトDVDを見て回った。すると、ひとつ僕の好みのDVDが新しく出ていた。ものすごく迷った。なにしろつい先日借りたばかりだ。連続で借りたりしたら、どんなに餓えた男なんだとツタヤの店員に呆れられるような気がした。それしかやることないのかよ、と。そんなふうに思われるのは絶対に嫌だった。

でも、最終的に僕は誘惑に負けた。昨日誕生日だったんだからいいじゃないか（何がいいのかわからないけれど）、と、僕は自分に言い訳した。

レジは混雑していて、四十歳手前くらい男性とまだ二十歳になったばかりくらいの若い女の子が接客をしていた。僕はレジに並びながら自分の接客をしてくれるのが男性の店員でありますようにと心のなかで念じていた。けれど、残念ながらその思いは届かなかった。僕の貸し出しの担当してくれたのは若い女の子だった。しかも、結構かわいい女の子だった。女の子は僕がアダルトDVDを返して

また新しくアダルトDVDを借りていこうとすると、ちょっとだけ、もしかしたらそんな気がしたただけなのかもしれないけれど、軽蔑するような目で僕の顔を見た。そしてそんな彼女の眼差しは僕を傷つけた。連続でアダルトDVDを借りて行く僕が完全に悪いのだけれど、でも、僕は好きなひとに嫌悪されたような気持ちになった。あーあ。

ツタヤへ（後書き）

情けない僕はいつも思っているの続きです。

マクドナルドへ

ツタヤを出ると、僕は再び自転車に跨がった。ペダルを漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。再び身体に吹き付けてくる生温い風。まるでそれは僕自身のようだ。僕は現在三十一歳で、彼女もいなくて、そんな自分をどうにかしたくて、でも、結局、何もできていない。何もしていない。小説家になりたいと思うのは良い。でも、その願望のために、僕は本当の意味で真剣に努力しているといえるだろうか？ 答えはノー。ノー。ノー。ノー！ 僕の志は身体に吹き付けてくる風みたいに生温い。

と、そんなことを考えていたら、危うく電柱にぶつかりそうになった。というか、ちよつとぶつかった。転びそうになる。でも、なんとか踏み留まる。まったく暗いことを考えていたら、目の前まで真っ暗になってしまった。

なんだか妙に身体に力が入らないなと思った。空腹だった。そういえば今日は朝から何も食べていない。腹が減ったと思ったら、腹が大袈裟な音を立てて鳴った。何か食わせろ！と胃袋が抗議しているみたいだ。

上手い具合に、すぐにそこにはマクドナルドがある。そういえばここ最近はマクドナルドなんて食べていない。誕生日の次の日のランチとしてはいささか華やかさに欠ける気もしたけれど、とりあえずマクドナルドに入ることにした。

訪れたマクドナルドは比較的空いていた。駅前の店舗ではないし、時間帯も時間帯なのでわざわざマクドナルドで食事を取るひとも少ないのだろう。僕はレジでチキンフィレオのセットを購入すると、

それを持って二階に行き、窓際の席を選んで座った。

窓の外には特になんというこない、どこにもでもありそうな景色が広がっていた。歩道があり、歩道の向こう側には車道があり、その車道の向こう側にまた歩道があつてその歩道にそつていくつかの店が並んでいる。床屋、バイク屋、100円ローソン。地味で退屈な景色だった。通りにそつて植えられた桜の木の葉桜も、そんな景色にはうんざりしているのか、弱い風に吹かれて憂鬱な表情で揺れていた。

僕はそんな景色をしばらくのあいだぼんやりと眺めていてから、思い出したようにチキンフィレオを手にとって口に運んだ。アイスコーヒーにガムシロップとミルクを入れてかき混ぜる。

食事を終えると、急激な眠気に襲われた。僕はたまらずテーブルの上につぶせになった。そしてそのまま十分か、十五分うとうと眠った。

しばらくしてから身体を起こすと、眠ったせいか、目の前に広がる景色が妙に白っぽく霞んで見えた。全てのものが本来の色彩のうえから薄く白の色彩を重ねたかのように見える。まるでまだ夢のなかにいるかのようにだった。

いつ間にか僕の前の席にはひとりの女の子が座っていた。わりとかわいい女の子だった。彼女は頼杖をついてぼんやりと窓の外の景色を眺めていた。窓の外に視線を向けた彼女の瞳は心持ち細められていて、そんな彼女の表情はどことなく哀しそうに見えた。まるで窓の外に見える景色のなかに何か失ったものを見出しているかのような表情だった。そして僕は思った。彼女は誰かに似ているな、と。しばらくのあいだ彼女が一体誰に似ているのか思い出せなかったの

だけれど、やがて僕は思い出した。彼女は深沢さんに似ているのだ。

深沢さんというのは僕が大学るときに好きだった女の子だ。ゼミが同じだった。僕が小説を書いていると言うと彼女は興味を持ってくれて、ぜひ読ませてくれたと言った。当時僕が書いていた小説はお世辞にも面白いとは言えない代物だったけれど（今だってかなりひどいの、その頃の小説はそれに輪をかけてひどかった）深沢さんは氣を使ってくれて面白いと言ってくれた。さわやかだね、と。

僕は彼女の言葉を鵜呑みにして小説を書き上げるたびに彼女に手渡した。きつと迷惑だったろうと思うけれど、彼女は決して嫌がらずに僕の書いた下らない小説を読んでくれた。そして読むたびに面白いねと笑顔で言ってくれた。べつに褒めてくれるからではないけれど、氣がつくと僕は彼女のことを好きになっていった。とても真剣に四六時中僕は彼女のことばかり考えていた。もちろん、僕は彼女に告白することを考えた。彼女と付き合いたいと思った。でも、残念ながら、彼女には他に好きなひとがいた。彼女は軽音サークルに入っていて、そのサークルの先輩のことがずっと好きだったのだ。なんで僕がそんなことを知っているのかというと、彼女からその先輩のことについて何度も相談を受けていたからだ。その先輩と仲良くなるめにはどうしたらいいのか、と。

結局、僕が彼女に自分の気持ちを告げることはなかった。大学を卒業するまで僕と彼女は友達同士のままだった。そしてまた彼女が憧れの先輩と付き合えることもなかった。

深沢さんとは大学を卒業してから一度も会っていない。深沢さんは大学を卒業したあと、実家のある岡山に帰って行った。卒業してからもしばらくのあいだはメールのやりとりをしていたのだけれど、いつの間にかどちらからということもなく連絡を取ることもなくなってしまった。

彼女は今頃どうしているんだろうな、と、懐かしく思い出した。そして彼女のことを考えると、少しだけ哀しい気持ちにもなった。心のなかに水たまりができていくような感じがあった。僕たちももう三十一歳だし、彼女もきつと今頃は結婚して子供のひとりでもいるのかもしれない。

それから僕はふと思い出した。彼女の歌声を。彼女は学園祭でいつもライブをやった。彼女がボーカルのスリーピースのバンドだった。いつも同じメンバーの組み合わせだったから、きつと軽音サークルの仲の良いメンバーで組んでいたのだろう。彼女たちは大概椎名林檎とかクラムボンとかのカバーをやっていたけれど、でも、最後の大学四年の学園祭では自分たちのオリジナルの曲を歌っていた。彼女たちのオリジナル曲はもちろんプロのそれに比べたら、だいぶ見劣りのするものではあったけれど、でも、それだからこそ逆に切々と伝わってくる何かがあるような気がした。彼女たちの拙い演奏や、ぎこちない歌声が、何か熱い風のようにになって立ち上がっていく気がした。彼女は歌っていた。叫んでいた。わたしたちはずっと前から伝えようとしてきた。何度も。何度も。でも、どうしても伝わらなくて。それがもどかしくて。切なくて。哀しくて。でも、今はこうも思っている。べつに伝わらなくてもいいと。ただ自分のなかで強く思っていればそれでいいんだって。

今見えている視界に重なるように、大学生の頃の深沢さんがにっこりと微笑みかけて、僕に向かって何かを語りかけようとして、でも、すぐに消えた。

マクドナルドへ（後書き）

情けない僕はいつも思っているの続きです。

激しい雨

マクドナルドを出ると、僕はまた自転車に跨がった。そしてペダルを漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。

後もう少しでアパートにたどり着くという頃になって、堪えきれなくなったように雨が降り出した。弱い雨ではなくて、うおりゃー！というかけ声がきこえきそうなくらいの勢いのある雨だった。なので、僕はずぶ濡れになった。まるで服を来たまま川とかに落ちたような感じた。なんで後五分くらい待つてなかったのかと腕を振り上げて空を覆う雨雲に向かって抗議したくなる。でも、僕がいくらか恨めしそうに雨雲を睨んだところで、雨雲は素知らぬ顔を決め込んでいる。というか、鼻くそをほじりながら、悠然とこちらを見下ろしている。完全に馬鹿にしている。なんだったらもつと雨を浴びせてやってもいいんだぜというような面構えだ。

アパートに戻ると僕は急いで濡れた服を脱ぎ、浴室に飛び込んだ。時刻はまだ午後の15時を回ったばかりで風呂に入るにはいささか早すぎるような気もしたけれど、この際身体も洗ってしまうことにする。

風呂から上がると、この前買っておいたコーヒー牛乳をラッパ飲みした。やっぱりお風呂上がりはこれにかぎるなあとしみじみと思う。

部屋のなかはしんと静まり返っていて、その静けさのなかを雨音が彷徨っていた。雨音は心持ち肩を落とし、顔を俯け、どこことなくいじけたような様子で部屋を彷徨っている。

僕は歩いてくと、パソコンの前に置いておる椅子に腰を下ろした。そしてパソコンのスイッチを入れるとパソコンを立ち上げた。僕は小説を書くときワードを使って書いている。原稿用紙を使って小説を書くことにこだわるひとも多いけれど、僕はパソコン派だ。原稿用紙の升目をひとつひとつ埋めるようにして小説を書いていくのも情緒があつて良いなと思わないでもないけれど、それではいかんせん思考のスピートに手が追いついていかないし、なにより、僕は字が下手くそだ。自分の書いた下手くそな字を見ているうちに、小説を書きたいという情熱も薄れていってしまう。

せつかくの休みなのだから小説を書かなくちゃ、と、僕は思った。でも、僕はこのところスランプだ。半年程前くらい長編の小説を書き上げて以来、まとまったものを書き上げることができないでいる。頭のなかにいくつかのイメージがあつて、それを頭のなかに思い浮かべているあいだはすごく良い小説が書けそうな気がしているのだけれど、でもそれを実際の文章に起こしてみると、全然納得のいく形にならないのだ。そのうちに頭のなかに浮かんでいたイメージも崩れて消えてしまう。

僕はキーボードのうえに両手をおいた。頭のなかに何か言葉が浮かんで来たら、すかさずそれを捕らえようと待ち構えた。でも、ただだけ意識を集中してみても、頭のなかにひとかけらの言葉も、イメージも浮かんではこなかった。空白のなかをアパートの外に降る雨音だけが当てもなく彷徨っていた。

そのうちに僕はだんだんイライラとしてきた。そしての苛立ちは少しずつ雨の水分を吸収していった。気がつくと、いつの間にか苛立ちはぼんやりとした哀しみ変わっていた。自分でも何が具体的に哀しいのかわからなかった。でも、とにかく心に上手く力が入らなくて、全てのことが物憂く感じられた。自分という意識と現実のあ

いだに分厚いガラスの壁ができているような気がした。そして僕はその分厚いガラスの壁を通してしか外の世界を見ることができなかった。

と、そのとき僕の意識のなかに響いてきたのは母親の声だった。母親の僕を心配するというよりは非難する声。もうあなたも三十歳なのだからそろそろちゃんとしたところに就職した方がいいんじゃないのかと母親は言った。そのうえで小説を書きたいのなら書けばいいじゃないか。

確かにそれもそうだ。僕もそういうことは何度も何度も考えてきた。でも、結局そうしてこなかった。なぜだろう。わからない。でも、何かが違う気がするんだ。就職した方がいいことはわかってるんだけど、でも、そうたしくないんだ。就職して働きながらでも小説は書けるのだろうけど、でも、僕にはたくさん時間がなくて、でも、それはいいわけではなくて、だから……。僕の現在の立場を取り繕っていたもの、今の僕を肯定するために補強していた壁のようなものが少し剥がれ落ちて行く。そして僕自身の弱さがむき出しになる。ちっぽけで、甘えた、弱い僕がすっかり怯えた表情でこちらを見ている。そして僕の意味はその弱さにすっかり飲み込まれてしまつて何もわからなくなつてしまう。

激しい雨（後書き）

情けない僕はいつも思っているの続きです。

いつかの優しい記憶

思考のうえにぴったりと黒い膜が張り付いてくる。その黒い膜はビニールでできているみたいだ。窮屈だ。とても。息ができない。僕の希望は思考のなかで窒息していく。まるで植物が枯れて行くみたいに。さわるとからからに乾いていて、手でさわるとバラバラに崩れてしまう。

僕がそのとき思い出したのは先月の友達の結婚式だった。先月僕は友人の結婚式に出席した。学生時代の友人が結婚したのだ。友人はみんなに祝福されて幸せそうに見えた。僕もそんな友人の幸せそうな姿を見て嬉しかった。でも、同時にどうしようもない寂しさを感じた。取り残されて行くような感覚を覚えた。学生時代の友人の多くが人生の新しいステージへと上がって行くのというのに、自分だけが同じ場所をぐるぐると周り続けているという徒労感、焦り。

黒い膜に覆われた思考は泡みたい膨れ上がって弾けた。一瞬、目の前から視覚が消えて行くように力が抜けた。そして今なら自殺していくひとの気持ちがわかるような気がした。自殺していくひとというのは考え抜いた末に自殺するのではなくて、きつと突発的に感情の迷路のようなものに迷い込んでしまつて、そこから抜け出せなくなつてしまつて、自殺してしまうのだ。きつと。

僕は瞳を閉じると、瞼の内側に広がる淡い闇のなかに思考をゆだねた。淡い闇のなかにアパートの外に降る雨音が模様を描いて行つた。さきほど比べていくらか弱くなつた雨音は闇のなかにどこか優しく懐かしい模様を描いて行つた。そしてその優しく懐かしい模様はいつかどこかで見た場所を思い起こさせた。その場所は最初逆光のなかで撮った写真ように白くぼんやりとされていて判然としな

かったのだけれど、時間の経過と伴に明確な像を結んだ。あれは大学の学食だ。時間帯は昼の15時過ぎで、お昼時を過ぎた学食はどちらかという閑散としている。その学食に僕は深沢さんとふたりでいる。次の講義がはじまるで時間があつて、僕たちはその待ち時間を学食で潰すことにしたのだ。窓の外には微かに黄金色の色素を帯びたような五月の日差しを浴びて、緑の木々が心地よさそうに風に揺れているのが見えた。

「ときどきね、自信が持てなくなるときがあるんだ」と、僕はそのとき言った。

深沢さんはそう言った僕の顔をいくらか不思議そうに見つめた。そのとき、僕たちは小説の話をしていた。僕が深沢さんに自分の書いた小説を渡して、それでそんな話になったのだ。確か。

「小説なんて書いて意味があるのになって」

「でも、西田くんは小説を書くのが好きなんですよ？」

「まあ、そうなんだけどね」

僕は深沢さんの視線を避けるように僅かに顔を俯けて歯切れの悪い答えを返した。

「だったら、難しく考えないで書けばいいんじゃない。書きたいから書く。すごくシンプルなことだと思うけどな」

深沢さんそういつてから悪戯っぽく微笑んだ。僕は深沢さんの微笑があまりにも素敵だったので、俯けていた顔を更に俯けた。

「だけどね」

僕は言葉を続けた。

「自分がものすごく苦労して書いた小説をあとで読み返してさ、それがすごくつまらなかったりすると、ものすごくがっかりしちゃうんだ。俺はこんなことに結構な労力と時間を費やしたのかと思うと」

「まあ、そういう感覚はわからないではないわね」

深沢さんは僅かに眉根を寄せて言った。

「わたしも自分で歌った歌をテープで録音してあとで聴きかすと、すぐくがつかつりするもの。自分ではもっと上手く歌えてるつもりなのに、実際に聴いてみると、イメージと全然違うんだもん」

そう言った深沢さんの表情がいかにも不服そうだったので、僕は少し笑ってしまった。つられるようにして深沢さんも笑った。そして、

「だから得てしてみんなそんなものなんじゃない。自分が書いたり、歌ったりしたものってなかなか納得なんてできないものなんだよ。きつと」

深沢さんにはにつきりとして言った。そして次の科白を探すように少しの間黙っていから、

「とにかくさ、難しいこと考えないで、書けばいいじゃない、小説というか、書いてよ。わたし、西田くんの書いた小説読みたいしさ」
やがて深沢さんは口を開くと言った。そう言った深沢さんの瞳のなかには木漏れ日の光を集めたような穏やかな光があった。

ケータイの着信音が鳴ったのはそのときだった。僕は閉じていた瞼を開くと、なんだろうと思って机の上に置いてあったケータイを見てみた。すると、バイト先の女友達からのメールが届いていた。メールの文面にはこうあった。誕生日、おめでとう。一日遅れてしまったけど、素敵な一年になるといいね。

僕はその文章を二度読み返してからケータイを机のうえに戻した。こんな僕の誕生日を覚えていてくれるひとがいたんだな、と、単純

に嬉しかった。

僕は再びパソコンのキーボードの上に両手を置いた。そして意識を集中した。頭のなかに散り散りになっていた物語のイメージがゆっくりとひとつの場所に集まってくるような感覚があった。

アパートの外にまだ雨音は響き続けていた。その雨音は何を悼んでいるでもり、何かを懐かしんでいるようでもあった。雨音のなかに色んな人の声が聞こえてくるように気がした。

僕は頭のなかに浮かんできたたくさんの言葉をゆっくりと書き込んで行った。

いつかの優しい記憶（後書き）

情けない僕はいつも思っているの最終話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2896v/>

情けない僕はいつも思っている

2011年10月7日20時07分発行